

コロナ禍の下の文化芸術活動

北海道文化団体協議会

道内各地で事業の中止が相次ぐ

広い北海道は14の行政単位（9総合振興局、5振興局）に

区割りされ、地域ごとの「文化団体協議会」「文化団体連絡協議会」が推進役となって各地の文化振興を担っている。

基本的に独自の活動を展開しているが、北海道文化団体協議会が取りまとめる連携事業として「道民芸術祭」を毎年実施。一律20万円の予算配分を行っている。

道民芸術祭の実施内容は多岐にわたり、舞台、展示、文芸誌編纂、研修事業など、地域の特性に合わせた内容で実施されている。

そこに降って湧いたコロナの「波」。令和2年2月、ダイヤモンド・プリンセス号での感染確認から遅れることわずか10日、札幌雪まつり観光により発症者が急増し、2月末には北海道知事が緊急事態を宣言して、状況は大きく変わるようになるのである。新年度事業が始まる直前というタイミングだった。

その結果、道民芸術祭は令和2年度が6地域で中止、3年

度も4地域で中止となり、実施した地域でも様々な形で縮小開催が相次ぐこととなった。

道民芸術祭が開催される会場のほとんどは市町村の公的施設ということもあり、それぞれの自治体が感染防御のために施設を閉館。さらには「芸術文化の殿堂」が一夜にしてワクチン接種会場に早変わりという動きが各地で見られた。

振り返ってみると、社会全体がコロナウイルスに対する知識が十分ではなく、予防イベント中止という対応が各地で取られていたことはやむを得ないことと受け止めていた。しかしながら、その中にあるもほぼ通常どおりの活動をした地域もあり、北海道内全体で見るとこの2年間は慎重派と実行派に2極化したように感じている。

誤解のないよう申し上げるが、慎重派の地域を責めているのではなく、だれもが経験したことのないウイルス蔓延の中の文化振興の難しさについて、得難い経験として今後に活かしていきたいと考えている。

写真「令和3年度道民芸術祭より」



Web配信の試み

コロナ禍の真っ只中で生まれた、事業を続ける工夫として、それまでは手をつけていなかったWeb配信を開始したことも記しておきたい。

令和2年秋、中止や縮小が相次ぐ道民芸術祭をはじめとした各地域での文化活動に元気を注入する目的から、再生Rebirthをテーマに、リモートで札幌・釧路・士別の各地を結ぶ文化フォーラムの無料Web配信を実施した。

このフォーラムの中では、「活動継続のため皆さんの顔を前に向かせる、上を向かせることが一番の苦勞」「地域のコミュニケーションツールとしての文化活動の役割」「魅力あるまち

づくりの観点から、しっかりとした文化政策を底流に持っている地域に今、光が当たっている。文化的視点がある街、明日を見つめる目線を持っている街に、人は旅に出たいと感じるのではないか」「こどもの文化的権利として、こどもたちがいかに芸術に触れる機会を作るかを大人が考えて行くべき」等々の印象に残るキーワード発言が多数あり、セコム(株)からの企業協賛もいただき充実した内容となった。

令和3年には、文化活動で育む多様性社会をテーマに、道内で暮らすフランス・アメリカ・オーストラリア・中国出身のパネリストを迎えた異文化フォーラムの配信も実施している。

時代の波から必要に迫られて着手した試みであったが、都市間の移動が制限されていたコロナ禍の折に恰好の手法となった。広い北海道の各地域、ひいては全世界から、それぞれ都合の良い時間に経費負担なく視聴できるメリットがあり、今後も対面開催にプラスして、配信を続けて行きたいと考えている。

写真「文化フォーラムの配信」



当協議会のユーチューブチャンネルから現在も無料でご視聴いただけるので、よろしければチャンネル登録をいただきたい。
QRコード（北海道文団協チャンネル）



コロナに強かったことも作品展

北海道文団協の事務局は札幌文団協の事務局も兼ねていることから、両団体の自主事業の運営に年間を通して追われる

日々が続く。新型コロナ感染の「先行地」となった北海道・札幌での事業展開に頭を悩ませたが、幸いにもこの3年度の間、開催時期を半年ずらした事業が1件あったが中止した事業は一つもなく、コロナの「波」の狭間をすり抜けるように「運よく」すべての事業を実施することができている。

こうした中、令和元年に第1回を開催した「こどもオール・ブリュット北海道みらい作品展」（以下こども作品展）についてご紹介したい。

このこども作品展は、障がいのあるなしにかかわらず同じ場で作品を発表するという子供たちの美術展で、全道の小学校、特別支援学校・学級に呼び掛けている。第1回の出展数は248点、第2回322点、第3回393点、第4回の昨年は463点と、参加数が増加しており、大きなやりがいを感じる反面、広い展示会場の確保やページ数が増える図録の作成などに嬉しい悲鳴を上げている。

結果論だが、こども作品展はコロナ社会にうまく合致した事業になったと受け止めている。理由としては下記の点が考えられる。

・学校の休校が相次ぎ、授業が再開されてもいわゆる主要科目が優先されて体育や図工などにしわ寄せが生まれた。在宅での学習課題として作品づくりを行うときに、こども作

品展の参加を目指すことがモチベーションになった話も伝わってきている。

・ 個人参加も可能なため、気軽に応募できる。

・ 感染予防をすれば展示会は比較的安全であることが理解され、多くの人が足を運んだ。

・ 様々なイベントが中止される中で定期開催を続けることができ、昨年は道内3カ所での入賞作品の移動展へと広がり、コロナ禍にあっても一定程度の実績を残すことができた。

写真① どもアール・ブリュット北海道みらい作品展（8月19日～21日）



コロナ禍の期間に体制を整備

コロナ感染が広まった期間、北海道文団協では事業推進に加えて組織体制の見直し等にも手を加えることができた。

事務局体制の強化、Webサイトの全面更新、イベント配信の実施、協賛企業の大増増など、事業を運営していく上で不可欠な運営面の強化を図った。とは言っても元々他県の文化団体さんからは見劣りする状況だったので、最低限の改善を図った程度とご理解いただきたい。

協賛企業の増加は主としてども作品展に対する企業の評価であり、予想以上の反応に望外の手応えを感じることができ、今後の継続開催に向けて力強い支えになってくれると期待している。

それでも芸術文化の灯は消さない、最近の動きから。

昨年で64回を迎えた「北海道文化集会」は当協議会では最古参の事業である。従来は一日のみの開催だったが今年は会期を4日間とし、道立近代美術館に会場を移して新たな取組みに挑戦。「展示する音楽と奏でる美術」をテーマに、分野をまたぐ様々なメニューを用意して市民の参加を促し、Web配信と併せて発信に力を入れた。引き続き各事業の見直しやブラッシュアップによって、コロナなどの社会情勢に屈しない体力をつけていきたい。

歴史的に見ても社会が困難に立ち向かうとき、真っ先に自
 粛せざるを得ないのが芸術文化。そしてそこから立ち直ると
 きに心の支えとして求められるのも芸術文化。世界史に残る
 現在の困難のなかで、まさに私たちの踏ん張りどころとい
 うことか。

試練に立ち向かうときこそ地域間の連携が求められること
 も既成の事実。東北・北海道芸術文化団体協議会の交流に今
 後とも期待を寄せている。



国立工芸館館長を迎えての鼎談



縄文土器づくりワークショップ



中国・内モンゴル出身者による馬頭琴の演奏

文：北海道文化団体協議会 事務局 伊藤 裕子